

## 共感性尺度の再構成

— 場面想定法に特化した共感性尺度の作成 —

小池 はるか<sup>1)</sup>

### 問題

共感性という概念は、心理学の世界では古くから使用されてきた。Lipps (1903) が「感情移入 (Einfühlung)」という用語を用いたのが始まりであり、Titchener (1909) が「empathy」という英訳をして、心理学用語となった (Wispe, 1986)。その後約100年間、共感性に関しては、様々な定義がなされてきた。しかし、これまでのところ明確な定義は存在しない。なぜなら、共感性の複数の側面があるにもかかわらず、過去の研究はその一側面のみしか扱っていないものが多かったからである。

第1に、「相手の感情と同じものを自分の中で経験する」といった情動的側面を共感性とする立場である。Stotland (1969) はこの立場に立ち、共感性を「他者が情緒的状态を経験しているか、または経験しようとしていると認知したため、観察者に生じる情緒的反応」と定義している。また、Batsonら (1987) は、共感性を「他人の苦しみや悩みを見ることから生じる他人中心の関心やあわれみの気持ち」と定義し、あわれみの気持ちこそが共感であるとした。このような考え方に基づいた共感性尺度がいくつか開発されている。Mehrabian & Epstein (1972) のQMEEやStotland (1969) の尺度などが、代表的なものである。わが国でも、高木 (1976) がQMEEを、地引 (1982) がStotlandの尺度を日本語に翻訳している。また、QMEEに関しては、加藤・高木 (1980) が、日本人向けに検討、修正している。

第2に、「相手の立場に立って物事を見て、相手の気持ちが分かる」といった認知的側面を共感性とする立場である。Borke (1971) やDymond (1948), Katz (1964), Rogers (1957) は、この立場を取っている代表的な研究である。Dymondは、共感性を「他者の思考・感情・行為の中に自分自身を想像的に置き換えて、

その人のあるがままの世界を構成すること」と定義し、他人について正確な知覚をすることと同義とした。また、Borkeは「他者の心的・情動的状态を理解する認知能力」と定義している。Katzは「他者の目をもって見、他者の耳をもって聞き、他人の心をもって感ずる」とし、Rogersは「クライアントの私的な世界をあたかも自分自身のものであるかのように感じ取り、『あたかも～のように』という性質を失わないこと」としている。中には、認知的側面を「視点取得もしくは役割取得」とする考え方 (Underwood & Moore, 1982) や、「心を読むスキル」とする考え方 (Ickes, 1993) も存在する。認知的側面を測定している代表的な尺度として、Hogan (1969) のEM尺度やElms (1966) の共感性尺度が挙げられる。Elmsの共感性尺度は、わが国でも、地引 (1982) によって翻訳されている。

最近では、この2つの研究の流れを統合した考え方が主流となっている。すなわち、共感性は、「情動なのか認知なのか」と論争するような概念ではなく、両側面があるという考え方である。この両側面はお互いに影響しあっていることが明らかになっており (デイヴィス, 1999)、共感性の多次元的な性質が強調されている。

Davis (1980, 1983) やFeshbach & Roe (1968), Hoffman (1975) は、この統合的な考え方を主張している。Feshbach & Roeは「知覚された対象の情緒的な経験に対する反応者の代理的情绪反応」と定義している。また、Hoffmanは「観察者における感情の覚醒であり、それは観察者自身の状況への反応ではなく、他者に対する代理的情绪反応である」としている。Davisは「他人の経験についてある個人がいだく反応を扱う一組の構成概念」と定義した (デイヴィス, 1999)。また、Davisは、先行研究で扱ってきた各構成概念をまとめ、組織的モデルを示している。このモデルには、見る側・相手・状況の特質である「先行条件」、共感的な結果が生み出される特定のメカニズムである「過程」、見る側の中に生じる認知的・感情的反応としての「個人内的結果」、相手に向けられる行動反応としての「対人的結果」という4つの構成概念が設定されている。このモデルは、

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程)

先行研究で扱ってきた各構成概念を「共感性ではない」と否定するのではなく、各構成概念を統合したという点で、現在最も優れたものと言えよう。

同時に、Davisは、情動的側面・認知的側面の両方を含む共感性の尺度（対人的反応性指標：the Interpersonal Reactivity Index：以下IRI）を作成している。わが国では、桜井（1988）、菊池（1999）が日本語に翻訳している。この尺度は現在、共感性の尺度として最も頻繁に使用されるものの1つである。

ところが、このIRIには、特定の対人場面の共感を測るには適切でない項目が含まれていることがある。例えば、IRIには、「よい映画を見たときには、すぐに主人公の立場に自分を置くことができる」という項目や、「気持ちが落ち着かない場面に出会った際には、独りぼっちだと感じることもある」という項目がある。しかし、映画の主人公に感情移入したり、動揺している時に孤独感を感じたりすることと、特定の場面における認知・行動（例えば「あらかじめしていた約束を直前でキャンセルする」という行為が生起するかどうかを評定する場合）との間に関連があるかどうかは疑問である。このことから、特定の場面における認知・行動と共感性との関連を検討する場合には、特定の対人場面に特化した共感性尺度が必要である可能性が考えられる。そこで本研究では、既存の共感性尺度から特定の対人場面においては不適切と思われる項目を除外し、特定の対人場面に特化した共感性尺度を再構成し、信頼性の検討を行なう。

また、斎藤・中村（1987）の改訂版対人的志向性尺度（以下IOS-V）の人間関係志向性因子項目、箱井・高木（1987）の援助規範意識尺度（the Helping Norm Scale：以下、HNS）、辻（1993）の他者意識尺度の内的他者意識項目を用いて、再構成する共感性尺度の妥当性を検討する。

対人的志向性（Interpersonal Orientation）とは、「相互依存関係の対人的側面に対して敏感であるかどうかという連続変数（斎藤・中村，1987）」である。人間関係志向性因子項目はIOS-Vの第1因子であり、「日頃から人間関係を大事にしている」「人付き合いが良い方だと思う」といった人間関係を志向している程度を測定する項目である。本研究では、この人間関係志向性と共感性の間に正の相関が見られると予測する。

HNSは、援助することについての規範意識を測定する尺度であり、4つの下位尺度がある。箱井（1990）では、この尺度と、共感性の情動的側面を測定する加藤・高木（1980）の共感性尺度との関連性を検討した。その結果、4つの下位尺度と共感性尺度の感情的冷たさとの間に負の相関が見られ、交換規範因子・弱者救済規範意

識と共感性尺度の感情的暖かさとの間に正の相関が見られた。よって、本研究では、共感性の情動的な側面とHNSの各下位尺度との間に正の相関が見られることが予測される。

内的他者意識は、他者の内面への意識・関心を測定している。この尺度では、他者の内面への意識・関心が高いほど、得点が低くなる。三原（1998）では、IRIの「視点取得」と内的他者意識との関連を検討した。その結果、視点取得得点が高いほど、他者の内面への意識・関心が高いことが示された。よって、本研究では、共感性の認知的な側面と内的他者意識との間に負の相関が見られることが予測される。

また、共感性尺度と社会的望ましき尺度（the Social Desirability：以下、SDS）との関連を検討する。社会的望ましき（Social Desirability：以下、SD）とは社会的規範からみて望ましいとされる方向で設問に答える反応形式で、調査結果に影響を与えてしまうとされている（北村・鈴木，1986）。共感性尺度とSDの間に正の相関が認められた場合、共感性尺度はSDの影響を受けていると考えられ、共感性を正確に測定できていない可能性が示唆される。よって、両者の間に負の相関が見られる、もしくは有意な相関がないことを確認する。

## 研究 1

### 目 的

研究1では、共感性尺度の再構成と信頼性の検討、及びIOS-Vの人間関係志向性因子項目の関連を見ることによって妥当性を検討する。仮説は以下の通りである。(1)共感性の各下位尺度得点は、人間関係志向性と正の相関がある。(2)共感性の各下位尺度得点は、SDSと負の相関がある、もしくは無相関である。

### 方 法

**調査対象者** 愛知県内の国立大学生2～4年生1クラス、公立大学生3～4年生1クラス、私立大学生3～4年生1クラス、及び私立短期大学生1～2年生1クラスの計205名（男性85名、女性120名）。調査は2001年1月に心理学の講義を受講する学生を対象に、複数の教室で実施された。平均年齢は、20.95歳であった。

**質問紙** ①共感性尺度 共感性の測定には、IRIの日本語訳から9項目を、Mehrabian（1972）、Stotland（1969）、Elms（1966）の質問紙尺度の日本語訳（地引，1982）から、特定の対人場面の共感を測るのに適切である11項目を抽出して用いた。回答形式は「当てはまらない（1点）」「どちらかといえば当てはまらない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかといえば当て

はまる（4点）」「当てはまる（5点）」の5件法とした。  
 ②SDS Crowne & Marlow (1960) のSDSの日本語訳（北村・鈴木, 1986）。このうち、北村・鈴木が適切だとしている10項目を用いた。回答形式は、「よく当てはまる（1点）」「やや当てはまる（2点）」「どちらとも言えない（3点）」「あまり当てはまらない（4点）」「まったく当てはまらない（5点）」の5件法とした。  
 ③人間関係志向性尺度 IOS-Vの人間関係志向性因子項目。全8項目。回答形式は「まったくそう思わない（1点）」「どちらかといえばそう思わない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかといえばそう思う（4点）」「まったくそう思う（5点）」の5件法とした。

結 果

SDS・人間関係志向性尺度をそれぞれ得点化した。

SDSは、得点が高いほど、社会的規範からみて望ましいとされる方向で設問に答える傾向にあることを示している。また、人間関係志向性は、得点が高いほど、人間関係を志向する程度が高いことを示している。

それぞれの尺度構成に従い、得点（それぞれ構成する項目の評定値の合計点）の平均値・標準偏差を算出した。人間関係志向性尺度とSDSに関しては、 $\alpha$ 係数を算出した。SDSは $\alpha$ 係数が低い（ $\alpha = .43$ ）、その後の分析の対象外とした。

1. 共感性項目の因子分析

再構成した共感性項目20項目について、因子分析（主成分分解, Varimax回転）を行なった。その結果、固有値の減衰状況と解釈可能性から2因子であると判断した（Table 1参照）。第1因子は、他者の苦しみに同情するという共感性の情動的側面に高い負荷量が付与されて

Table 1 共感性尺度の因子分析（研究1）

	Factor 1	Factor 2
＜情動的共感性＞		
・まわりの人たちが悩んだり苦しんだりしていても、私は平静でいることができる。(R)	.73	-.09
・人が沈み込んでいると、私は自分だけ平静でいらなくなってしまふ。	.70	-.04
・自分より不幸な人々について、やさしさや配慮の感情を持つことが多い。	.68	.04
・その人の抱えている問題が、まるで自分の問題であるかのように感じられることがある。	.64	.25
・沈み込んでいる不幸な人を見ると、私は辛い気持ちになる。	.61	.21
・他の人びとが問題をかかえていても、気の毒に思うことはあまりない。(R)	.53	.34
・自分はやさしい気持ちの人間だと思っている。	.51	-.03
・他人が経験したことに、私は強く心を動かされたり、深く巻き込まれてしまふ。	.49	.17
・私は他の人達よりも、人々の感情や気持ちを理解しよう心がけている。	.45	.35
＜認知的共感性＞		
・どんな問題にも2つの側面があるから、その両面を見るようにつとめている。	-.06	.72
・人と意見が合わない時には、その人がそうした意見を持つ理由を心の中であれこれと考えてみる。	.07	.70
・友だちのすることを理解しようとするときには、向こうから見るとどう見えるのかを想像することがある。	.21	.62
・非常に不機嫌そうな人に出会うと、私もしその人だったらどんな感じをもつだろうか考えてみる。	.15	.51
・物事を決めるには、みんなの反対意見をよく聞いてからにしようとする。	.18	.50
・自分が正しいと確信している場合には、他人の意見を聞くのに時間を使ったりはしない。(R)	.03	.46
＜残余項目＞		
・他の人びとの不幸が気になることはほとんどない。(R)	.53	.45
・「他人」の立場から物事を考えるのが、むずかしいと思うことがある。(R)	.05	.03
・公正でない扱いをされている人を見ても、かわいそうに思うことは少ない。	.31	.34
・私はいろいろなタイプの人になった時のことを想像してみることが好きだ。	.18	.25
・人の心の中で起きていることは、他人には本当はわからないものである。	.00	-.05
2 乗 和	3.76	2.88
寄与率 (%)	18.8	14.4

(R) = 逆転項目

Table 2 共感性各下位尺度得点・人間関係志向性尺度得点の平均と標準偏差

	平均値	標準偏差
共感性		
情動的共感性	30.95	5.52
認知的共感性	20.40	3.94
人間関係志向性	28.12	4.26

いることから、「情動的共感性」と名づけた。第2因子は、他者の視点を取るといった共感性の認知的側面を反映していることから、「認知的共感性」と名づけた。両因子に対して負荷の高い1項目と、各因子に対して.40以下の因子負荷量の4項目を削除し、各因子に対して.40以上の因子負荷量をもつ項目を各下位尺度項目として採用した。因子ごとに項目の得点を合計して、下位尺度得点とした（満点は情動的共感性因子45点、認知的共感性因子30点）。各下位尺度得点が高いほど、共感性が高いことを示している。 $\alpha$ 係数を算出したところ、第1因子は.80、第2因子は.68であった。共感性の各下位尺度は一定の信頼性が確認されたといえる。

## 2. 共感性尺度の妥当性検討

共感性尺度の妥当性検討のために、共感性各下位尺度と人間関係志向性尺度の相関分析を行なった。情動的共感性因子・認知的共感性因子と人間関係志向性尺度との間に、各々正の相関が認められた（それぞれ $r=.44$ ,  $p<.001$ ,  $r=.31$   $p<.001$ ）。よって、仮説(1)は支持された。ただし、共感性尺度の妥当性を確認するためには、1尺度との関連を見ただけでは不十分であると考えられる。人間関係志向性尺度以外の他尺度との関連も検討する必要がある。

## 研究 2

### 目的

研究1では、共感性尺度と人間関係志向性との正の相関が確認された。研究2では、妥当性をさらに高めるために、他尺度との関連の検討（HNS・内的他者意識・SDS）を行なう。SDSは、研究1において $\alpha$ 係数が.60に達しなかったため、分析から除外された。そこで、研究2においては回答形式を変え、もう一度測定する。仮説は以下の通りである。(1)情動的共感性尺度得点は、援助規範意識尺度の各下位尺度得点と正の相関がある。(2)認知的共感性尺度得点は、内的他者意識尺度と負の相関がある。(3)共感性の各下位尺度得点は、SDSと負の相関がある、もしくは無相関である。

## 方法

**調査対象者** 愛知県内の国立大学生1～4年生1クラス及び私立短期大学生1年生1クラス144名（男性70名、女性74名）。愛知県の専門学校学生1年生1クラス及び三重県内の専門学校学生2クラス126名（男性11名、女性115名）。調査は2001年7月に心理学の講義を受講する学生を対象に、複数の教室で実施された。平均年齢は19.82歳であった。

**質問紙** ①共感性尺度 研究1で再構成した全15項目。研究1で因子負荷量が.40以下であった項目を削除し、不適切な表現は修正した。回答形式は、研究1と同じく「当てはまらない（1点）」「どちらかといえば当てはまらない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかといえば当てはまる（4点）」「当てはまる（5点）」の5件法とした。

②SDS 研究1で用いたものと同じもの。ただし、回答形式が研究1と異なる。「当てはまらない（1点）」「どちらかといえば当てはまらない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかといえば当てはまる（4点）」「当てはまる（5点）」の5件法とした。

③HNS 全29項目。回答形式は、「非常に反対する（1点）」「反対する（2点）」「どちらともいえない（3点）」「賛成する（4点）」「非常に賛成する（5点）」の5件法とした。

④内的他者意識尺度 全7項目。回答形式は、「全くそう（1点）」「そう（2点）」「どちらともいえない（3点）」「ちがう（4点）」「全く違う（5点）」の5件法とした。

## 結果

SDS・HNS・内的他者意識尺度をそれぞれ得点化した。HNSは、得点が高いほど、援助に対する意識が高いことを示している。また、内的他者意識尺度は、得点が高いほど、他者の内面情報に関する意識や関心が低いことを示している。

### 1. 共感性項目の因子分析

共感性項目を因子分析した結果、解釈可能性から2因子に分かれた（Table 3参照）。研究1と同様、第1因子は情動的共感性因子、第2因子は認知的共感性因子と名づけられた。.40未満の因子負荷量の2項目を削除し、各因子に対して.40以上の因子負荷量をもつ項目を各下位尺度項目として採用した。因子ごとに項目の得点を合計して、下位尺度得点とした（満点は情動的共感性因子35点、認知的共感性因子30点）。 $\alpha$ 係数は、それぞれ.77、.69となった。それぞれの尺度構成にしたがい、尺度得点または下位尺度得点（それぞれ構成する項目の評

Table 3 共感性尺度の因子分析 (研究2)

	Factor 1	Factor 2
<b>&lt;情動的共感性&gt;</b>		
・まわりの人たちが悩んだり苦しんだりしていても、平静でいることができる。(R)	.72	.03
・他の人びとが問題をかかえていても、気の毒に思うことはない。(R)	.70	.07
・人が沈み込んでいると、私は自分だけ平静でいらなくなってしまう。	.69	.08
・沈み込んでいる不幸な人を見ると、辛い気持ちになる。	.68	.22
・自分より不幸な人々に対して、やさしさや配慮の感情を持てる。	.56	.33
・他人が経験したことに、強く心を動かされたり、深く巻き込まれてしまう。	.53	.02
・その人の抱えている問題が、まるで自分の問題であるかのように感じられることがある。	.51	.36
<b>&lt;認知的共感性&gt;</b>		
・物事を決めるには、みんなの反対意見をよく聞いてからにしようとする。	.03	.65
・どんな問題にも2つの側面があるから、その両面を見るようにつとめている。	-.14	.65
・人と意見が合わない時には、その人がそうした意見を持つ理由を心の中であれこれと考 えてみる。	.13	.65
・他の人達よりも、人々の感情や気持ちを理解しようと心がけている。	.26	.60
・友だちのすることを理解しようとするときには、相手から見るとどう見えるのかを想像 する。	.07	.56
・非常に不機嫌そうな人に出会ったとき、「私がもしその人だったらどう感じているだろ うか」を考えてみる。	.18	.50
<b>&lt;残余項目&gt;</b>		
・自分が正しいと確信している場合には、他人の意見を聞くのに時間を使ったりはしない。 (R)	.15	.39
・自分はやさしい気持ちを持ちあわせている人間だ。	.20	.26
	2 乗 和	3.02 2.71
	寄与率 (%)	20.1 18.0

(R) = 逆転項目

Table 4 共感性各下位尺度得点・SDS・HNS・内的他者意識尺度得点の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
共感性		
情動的共感性	25.03	4.57
認知的共感性	19.98	3.97
SDS	27.27	5.52
HNS		
返済規範意識	31.96	4.67
自己犠牲規範意識	25.76	4.37
弱者救済規範意識	21.71	3.05
内的他者意識	17.20	5.01

定値の合計点)の平均値・標準偏差 (Table 4) を算出した。α係数が低いHNSの交換規範意識 (α = .58) については、その後の分析の対象外とした。

### 1. 共感性尺度の妥当性検討

共感性各下位尺度とSDS・HNS各下位尺度・内的他者意識尺度との相関をTable 5に示す。情動的共感性

Table 5 共感性尺度とSDS・HNS・内的他者意識尺度との相関

	情動的共感性	認知的共感性
SDS	.02	.37***
返済規範意識	.39***	.22***
自己犠牲規範意識	.55***	.29***
弱者救済規範意識	.46***	.20**
内的他者意識	-.22***	-.29***
	***p<.001	**p<.01

尺度は、HNSのどの下位尺度とも弱い～中程度の正の相関が見られた。よって、仮説(1)は支持され、情動的共感性尺度の妥当性が確認された。また、認知的共感性と内的他者意識との間に、弱い負の相関が見られた。よって、仮説(2)は支持され、認知的共感性尺度の妥当性が確認された。

また、情動的共感性尺度とSDSとの間に有意な相関は見られなかった。よって、情動的共感性尺度に関しては、仮説(3)が支持された。しかし、認知的共感性尺度とSDSとの間に正の相関が見られた。よって、認知的共

感性尺度に関しては、仮説(3)は支持されなかった。

## 考察

本研究では、特定の対人場面に特化した共感性尺度を作成するために、既存の共感性尺度の再構成を行なった。再構成した共感性尺度は2因子に分かれ、それぞれ共感性の情動的な側面と認知的な側面を反映しているものと考えられた。なお、研究1と研究2では、因子構造に違いが見られたが、その後の研究においては一貫して研究2の因子構造が認められ、一定の信頼性が確認されている(小池, 2002; 小池, 2003)。ただし、第2因子の認知的共感性の $\alpha$ 係数は.70以下とやや低めである。今後信頼性を高めるために、項目の追加や不適切な項目の削除、不適切な表現の訂正等が必要かもしれない。

また、妥当性検討に関しては、予測通り、共感性尺度と人間関係志向性・HNSの下位尺度との間に正の相関が、内的他者意識尺度との間に負の相関が見られ、妥当性が確認された。ただし、認知的共感性とSDSとの間に正の相関が認められた。本来のSDSの回答形式を変えたこと、SDSの $\alpha$ 係数が高くなかったこと( $\alpha = .59$ )から、SDSが正確に測定できていない可能性も考えられる。今後は、本来のSDSの回答形式に従い、共感性尺度との関連を再度検討する必要があるだろう。

## 引用文献

- Batson, C. D., Fultz, J., & Schoenrade, P. A. 1987 Distress and empathy: Two qualitatively distinct vicarious emotions with different motivational consequences. *Journal of Personality*, 55, 19-39.
- Borke, H. 1971 Interpersonal perception of young children: Egocentrism or empathy? *Developmental Psychology*, 5, 263-269
- Crowne, D. P., Marlowe, D. 1960 A new scale of social desirability independent of psychopathology. *Journal of Consulting Psychology*, 24, 349-354.
- Davis, M. H. 1980 A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 10, 85. (デイヴィス, 1999の引用による)
- Davis, M. H. 1983 Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- デイヴィスM. H. 菊池章夫(訳) 1999 共感の社会心理学 川島書店
- Dymond, R. F. 1948 A preliminary investigation of the relation of insight and empathy. *Journal of Consulting Psychology*, 12, 127-133.
- 出口保行・斉藤耕二 1990 共感性尺度の因子分析的研究 東京学芸大学紀要1部門, 41, 183-196.
- Elms, A. C. 1966 *Influence of fantasy ability on attitude change through role-playing*. 33-40. (出口・斉藤, 1990の引用による)
- Feffer, M. H., & Gourevitch, V. 1960 Cognitive aspects of role-taking in children. *Journal of Personality*, 28, 383-396.
- Feshbach, N. D., & Roe, K. 1968 Empathy in six- and seven-years-olds. *Child Development*, 39, 133-145.
- 箱井英寿 1990 共感性を援助規範意識との関連について—正準相関分析法を用いて—大阪薫英女子短期大学研究報告, 25, 39-47.
- 箱井英寿・高木修 1987 援助規範意識の性別, 年代, および, 世代間の比較 社会心理学研究, 3, 39-47.
- Hoffman, M. L. 1975 Altruism behavior and the parent-child relationship. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 937-943.
- Hogan, R. 1969 Development of an empathy scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 307-316.
- Ickes, W. 1993 Empathic accuracy. *Journal of Personality*, 61, 587-610.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, 2, 33-42.
- Katz, B. 1964 *Empathy; It's nature and uses*: The Free Press of Glencoe. (出口・斉藤, 1990の引用による)
- 北村俊則・鈴木忠治 1986 日本語版 Social Desirability Scaleについて 社会精神医学, 9, 2, 173-180.
- 小池はるか 2002 対人的迷惑行為と共感性との関連—迷惑高認知場面及び迷惑低認知場面における行為生起と共感性との関連—日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 298-299.
- 小池はるか 2003 対人的迷惑行為と共感性との関連(2)—友人・顔見知りに対する行為生起と共感性との関連—日本グループダイナミクス学会第50回大会発表論文集, 140-141.

- Lipps, T. 1903 Einfühlung, inner Nachahmung, und Organempfindungen. *Archiv für die gesamte psychologie*, 2, 185-204. (Wispé, 1986の引用による)
- Mehrabian, A. & Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40, 523-543.
- 三原亘 1998 共感性尺度の認知的側面に関する一研究 性格心理学研究, 6, 2, 152-153.
- Rogers, C. R. 1957 The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 95-103.
- 桜井茂男 1988 大学生における共感と援助行動の関係—多次元共感測定尺度を用いて— 奈良教育大学紀要, 37, 1 (人文・社会), 149-154.
- 斎藤和志・中村雅彦 1987 对人的志向性尺度作成の試み 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 34, 97-109.
- Stotland, E. 1969 Exploratory investigation of empathy. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, 14, 271-314.
- Titchener, E. 1909 *Elementary psychology of the thought processes*. New York: Macmillan. (デイヴィス, 1999の引用による)
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房
- 高木秀明 1976 情動的共感性と援助行動の関係に関する研究 日本教育心理学会第18回総会発表論文集, 448-449.
- 辻岡美延・村山繁 1975 価値観の六次元 関西大学社会学部紀要, 7, 161-174
- Underwood, B., & Moore, B. 1982 Perspective-taking and altruism. *Psychological Bulletin*, 91, 143-173.
- 和田実・久世敏雄 1990 現代青年の規範意識と私生活主義—パーソナリティ特性との関連について— 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 37, 23-30.
- Wispé, L. 1986 The distinction between sympathy and empathy: To call forth a concept, a word is needed. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 314-321.
- 地引はるみ 1982 共感性尺度作成の試み 東京学芸大学 卒業論文 (未公開, 出口・斎藤, 1990の引用による)

(2003年9月30日 受稿)

#### <付記>

本研究は修士論文 (平成13年度名古屋大学大学院教育発達科学研究科) の一部に加筆・修正を行なったものである。なお, 本研究の一部は, 日本社会心理学会第42回大会 (2001年愛知学院大学) において報告された。

ABSTRACT

The Development of Situation Specific Empathy Scale

Haruka KOIKE

Two studies were aimed at constructing an empathy scale which featured a specific interpersonal situation and its reliability and validity were examined. In Study 1, 205 students responded to 20 items which were selected from existing empathy measures and other scales (Human Relation Directedness and SDS). The results of factor analysis revealed the following two factors: 1) emotional empathy, and 2) cognitive empathy. These factors demonstrated adequate reliability and validity. In Study 2, 270 students responded to 15 items used in Study 1 along with other scales (HNS, Internal Other-Consciousness and SDS). Each factor demonstrated adequate reliability and validity.

Key words : empathy, human relation directedness, social desirability, helping norm,  
other-consciousness